



Title	【書籍紹介】石川義宗著『シェーカー教徒の思想とデザイン : 祈りの中の家具と建築』
Author(s)	面矢, 慎介
Citation	デザイン理論. 2025, 86, p. 70-71
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/102497
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

【書籍紹介】

石川義宗著

『シェーカー教徒の思想とデザイン ― 祈りの中の家具と建築』

思文閣出版 2025年2月25日発行 総278頁

面矢 慎介 元・滋賀県立大学

デザイン関係者なら誰もが知っているシェーカー家具。モダンデザインの先駆とも言われてきた。そのシェーカー教徒の家具と建築について学術的に論じた書物は、本邦でこれまでほとんどなかった。アメリカに渡ったプロテスタントの一派であるシェーカー教徒の教義と、その家具・建築デザインにはどのような関係があったのか。その後のモダンデザインと何がどのように違うのか。現在に至るシェーカーデザインの評価はどう変遷してきたのか…。

これらの難題に正面から立ち向かった著者が、シェーカー村の現地調査や教義書の読解を含む長年の研究をまとめたのが本書である。全編を通して、著者が現地で撮影してきた写真を含む多くの図版が理解を助けてくれるのも有り難い。

序章では、まず先行研究として、シェーカー研究の基盤を築いた Andrews (1894-1964) の『Shaker's Furniture』(1937) が批判的に検討される。そして本書の問題意識として、シェーカー教徒自身が家具や建築をどう見ていたのか（主観的イメージ）の復元を試みることが表明される。この目的のための研究方法として、記号論の応用、デザイン史研究の潮流、室内イメージの探究、美術における修辞、家事労働の意義などをそれぞれ念頭に置いたことが述べられている。

第1～第3章は、それぞれが3節に分かれ、第1節「家具と建築」では家具と建築を観察し、第2節「生活様式と制度」では家具や建築と関係する生活のあり方を見据え、第3節「教義と論証」ではそれらを司る思想を教義書から解き明かす、という構成となっている。

第1章「アンの眼差し」(1790-1810年代)では、シェーカーの草創期が考察される。中でも、家具の「簡素化」という現象に注目し、彼らの間で伝えられていた口伝のルールにおいて、装飾が抑制されていたことを指摘する。さらにシェーカーの村が「福音に沿った秩序」という信仰の柱になった考え方で作られていたとして、「光の木」と呼ばれる樹木のドローイング、寄宿舎などの左右対称性（中心のシンボリズム）を指摘し、家具、建築、村の全体が直線の推奨、曲線の限定、彩色や素材の制限などの共通性を持ったこと、そしてそのデザインを全ての村で統一する取り組みが行われたことが論じられる。章の後半では、教義書がシェーカーを「福音の奉仕者」と位置付け、村の制度的な仕組みの基本方針が定められたこと、そのイメージの展開としての偶像崇拜の禁止、伝統的な教会美術・装飾の否定（単純明快さの称揚）を教義書の記述で確認している。

第2章「楽園の様相」(1820-1850年代)では、シェーカーの村が最も繁栄した1820年代から1850年代までに注目し「福音に沿った秩序」がどのように完成したのかが検討される。家具や建築が充実し、さまざまな建物や施設に簡素化の現象が見られるようになった様子が確認され、さらに教義書において簡素の概念がどのように発達したのかが論じられている。この時期の家具の特徴としての軽量化、椅子を壁に掛ける習慣、部品を極限まで減らしたことによる強度の不足、必要以上に多い引き出しの意味、室内に規則的に配置されたベグ（引っ掛け用の木釘）などが具体的に論じら

れる。「スタンド」と呼ばれる3本足の小テーブルについては、18世紀末から19世紀後半までの構造的変化とその意味が検討されている。また、この時期の村の景観を描いた地図を取り上げて、そのシンボリズムを考察し、彼らの地図は楽園のイメージを表現したものと述べる。次いで、この時期のシェーカーの生活様式として、食事、農耕、教育、農産物加工、集会のダンスなどが解説される。そして、労働を祈りとするシェーカーの労働観がラスキンの『芸術経済論』（1857）と共鳴することを指摘している。

第3章「省察と問い直し」（1860-1890年代）では、シェーカー村の衰退・終末期である19世紀後半、特にそのデザインの「世俗化」が考察される。この頃になると、シェーカーのデザインに当時アメリカで流行していた様式家具の影響が見られるようになり、それまでなかった装飾が施されるようになった。これは書き物机、裁縫机などを例に論じられる。さらに椅子の規格化と快適性の追求について、ロッキングチェア、回転椅子、スラットバックチェアの後脚先端に取り付ける金属製ソケットなどを例に論じられている。この頃の生活様式の変化として、商業（乾燥とうもろこしの製造販売）の活性化、木工機械の設置、家具製造工場の設立などに沿って生活様式の世俗化（一般的なプロテスタントの経済的道德論の受容）が進んだ。この頃には、さまざまな家具メーカーによってシェーカー家具のイミテーションが販売されるようになり、フィラデルフィア万博（1876）にシェーカー家具が出品されてアメリカを代表する製品になった反面、祈りとは切り離された新たな意味を持つようになったことが指摘されている。当時の教議書では、村の様相の変化（世俗化）に対応して、「古い楽園」から「新しい楽園」への移行が説かれているという。

終章の第1節「現代の評価」では、シェーカーのデザインと思想が、なぜ20世紀になってモダ

ンデザインとして評価されたのかが考察される。そのためにアーツ・アンド・クラフツ運動と機能主義に関する1930年代の評価、具体的には、前出のAndrewsのほか、Brooks（1886-1963）、Greenough（1805-1852）、Sullivan（1856-1924）、Stickley（1858-1942）らの論考を振り返っている。これらの論考からみたシェーカーの現代的意義については、今後もさらに検討が必要かもしれない。

終章第2節「解釈の展開」では、これまで内外で開催された4つのシェーカー展覧会カタログから、シェーカーのデザインに対する評価の変遷が論じられる。ここではシェーカー家具を、幾何学的な簡素さの類像と見做し、室内を芸術的に捉えるイメージ（「シェーカーの手工芸」展、1935年、ホイットニー美術館）、建築に内包された指標と見做し、建築空間の一部として、または生活の場として捉えるイメージ（「シェーカーたち」展、1974年、ディ・ノイエ・ザムルングおよび「シェーカー・デザイン」展、1992年、セゾン美術館）、職人たちの精神を宿した象徴と見做し、宗教的信念の表出として捉えるイメージ（「似たもの同士」展、1995年、アメリカの民藝国際博物館）と、そのイメージ・評価の変遷をまとめている。

本書は一貫してシェーカーの家具や建築が「祈りの表現」であったと論じているが、これまで日本で行われてきたデザイン史研究では、宗教的背景に注目したものは少なかった。ヨーロッパ発祥のデザインのモダニズムにはキリスト教の教義が内包されているとの説があるが、十分に論述された例は少ない。本書ではシェーカーとの対比で、柳宗悦らの仏教思想と民藝の関係にも言及されている。

本書は家具史のみならず、今後のデザイン史研究にもさまざまな示唆を与えてくれるだろう。今後、著者によって、シェーカーのデザイン思想とその後の（欧米のみならず日本までを含む）デザイン思想との比較研究が進められることにも期待したい。